
夏の日の幻

bamse

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の日の幻

【コード】

N9947D

【作者名】

b a m s e

【あらすじ】

突然謎の死を遂げた親友。生前書き残した日記にはその理由が記されていた。

(前書き)

三作目を書いてみました。宜しければご一読下さい。

蝉の声にすら苛立つのは哀しみのせいかな怒りのせいかな。シャツが汗ばんだ肌にまとわりつく感覚さえ、全身の皮膚を剥いでしまいたい程の煩わしさを覚える。混乱し続ける自分の頭は、決して刺す様な日差し在所為だけではあるまい。むせるような人いきれの中、かすかに香る線香の匂いだけがささくれだっている俺の心を和ませてくれる。葬式で香を焚くのはそのためなのかも知れない。

誰かに寄りかかれてふと我に返った。それは美佳だった。もうあれから4日も経つというのに、彼女の涙は涸れる事を知らず頬に幾多の線を描き続ける。抱き締めて支えてやりたい衝動を抑え、俺は両の拳を握り締めた。俺には充分過ぎるほどわかっていて。彼女の求める胸は俺ではないのだから。そして彼女の求めるものはもう失われていたのだから。

分かっていても尚一層、抱き締めたがるその腕に、震えるほどの力を込めて、義理を通した俺がいた。

あいつは4日前に死んだ。状況から見て自殺としか思えなかった。あいつの家の裏にある裏山で宅地造成が最近始まったと聞いている。その工事現場で轟音を唸らせて走るブルドーザーに飛び込むほどの勇氣と無謀をどんな心理が持たせたのか。親友であったはずの俺にも想像は付かない。あいつの彼女だった美佳ですら同じ思いでいることだろう。死なねばならない理由など何一つ思いつかない。この夏休みに一体どんな、若干17歳で人生の幕を引かねばならぬほどの事があったのか。残された我々にはただ呆然と立ち尽くすことしか許されなかった。

友と誓いし君なれば、心通わす仲の筈、その親友の終焉しゆうえんの、心解かいせ

ぬもどかしさ。

初七日も終わり俺はあいつの家を訪ねた。憔悴しきつた母親が現れ、「息子の遺品を整理する前に何か持って行って欲しい。あなたが持っていてくれれば息子もきつと喜ぶ。」

とどこか焦点の合わぬ目で呟いた。

あいつの部屋に入って驚いた。何一つ手を付けられていないその部屋に、息子がいつか帰ってくるのではという両親の哀しい願いが満ちていた。ふと本棚を見ると日記帳が並んでいた。成程、几帳面なあいつらしいと苦笑しながら手に取ってみた。

日記には俺自身ですら忘れていたようなあいつと俺の事で一杯だった。サイクリングで道に迷い、トラックに乗せて貰ってようやく帰ってこれた事、釣りに行ったが竿を流してしまい、日が暮れるまで川で泳いだ事、俺との思い出がビッシリと書かれていた。

『俺の事ばかりか書きちゃって。』

思わず目頭が熱くなり、日記を濡らさぬように上を向いた。

想い巡らす過去の日々、戻らぬものとは知りながら、それでも良き日を振り返る、過去の記憶を辿るほど、今の嘆きは増すばかり。

あいつの日記を預かり、自分の家に戻ってから俺は夜を徹して日記を読み続けた。そして東の空が白み始めた頃、俺は最後の日記を手にとった。その時ふと閃いた、これを読めばあいつが死んだ理由が分かるかも知れない。もちろんそれを知ったところであいつが帰ってくるわけではないのは承知の上だ。だが知らずにはいられなかった。義務感にも似た気持ちに駆られつつ、俺は最初のページを繰った。

「7月28日 終業式の今日、僕は初めてコンタクトを付けて登校した・・・」

そういえば夏休みに入る前日、あいつは眼鏡をしていなかった。

『何だよ、今日眼鏡してないじゃんか、忘れてきたのか？』

『馬鹿、コンタクトだよ、コンタクト。』

『ふーん・・・美佳ちゃんのリクエストか？』

『違うって、たださあ・・・』

『なんだよ。』

『眼鏡無いほうがいけないか、俺？』

『・・・』

「・・・結局美佳にも違う人みたいと言われただけだった。不愉快。

「思わず吹き出してしまった。後でからかってやろう。そう思ってからふと思いついた。この日記が何故俺の手元にあるのかを。なんとも例えようのない寂しさを振り払うようにページを繰った。

「7月29日 いよいよ夏休みに入った。コンタクトに慣れる為、毎日付ける事にしたがどうも目がチラつく。宿題の数式が揺らめくようで今ひとつ集中できない。時にあいつや美佳はちゃんと宿題に取り掛かっているのだろうか？毎年のように夏休みが終わりに近づいてから、猫撫で声で見せてくれと頼みに来るのは、最早晩夏の風物詩とも言える。僕は彼らの友人であり彼氏ではあるが便利屋ではない。本人達の為にもならないし何より釈然としない。だがこんなことを言えばまた、ケチ臭いと言われてしまうのがオチだ。今回も見せてやるとするか。やれやれ。」

大きなお世話だ。

「7月30日 どうもおかしい、目のちらつきがひどくなる一方だ。一度医者に相談すべきなのか？確かにコンタクトは合わない人もい

ると聞いていたが、これでは使い物にならない。安くは無いい物なので両親には悪いが、コンタクトを無駄にってしまうかも知れない。まあ目の方が大事だから仕方あるまい。今日は疲れた。」

俺は勝手ながらいらついできた。ちつとも確信に触れないではないか。別に俺に説明する為に書いたものではないから仕方が無いか、そう思いなおしてページを繰った。

「7月31日 医者に診て貰ったが別にどうという事も無さそうだな。家に帰る途中あれこれ見つめてみたが、少しチラつきは収まってきた。コンタクトに慣れてきたのだろうか？もうしばらく付けていれば気にならなくなるのかも知れない。それにしてもここ何日かは妙に疲れやすい。目に負担がかかっているのだろうか？いささか不安である。」

ページを繰ってみるとこれまで整然と書かれていた文字が細かく震えていた。文字にあいつの動揺が現れている。核心に迫りつつある期待を胸に、俺は興奮気味に読み始めた。

「8月1日 僕はどうかしてしまったのだろうか……。しかし確かに見えた。あれは一体……」

8月1日と言えばあいつが死ぬ4日前のことだ。あいつは何を見たのか？

「……とにかく落ち着いてありのままをここに記す。始めは蝶かと思った。午後3時くらいだったと思う。暑くて開け放しの窓からそれは入ってきた。蝶にしては大きいなと思つているとそれは机の上に舞い降りてきた。確かにそれは小さな人間だった。背中に透き通るような飴色の翅を持った女だった。その、なんと言ったら良い

のか、その生き物は金色の燐粉を振りまきながら机の上を軽やかに跳ね回り始めた。童話から抜け出してきたような風景に僕は驚く事すら忘れ、ただその美しい生き物の舞うようなステップに呆けていた。吸い寄せられるように右手を伸ばし、この手に触れようとしたその瞬間、その生き物は驚いたように飛び上がり、逃げるように窓から飛び出していった。あれは一体なんだったのか？決して幻覚では無い。その証拠にあれが落として行った金色の燐粉が机に残っている。とりあえず日記に塗りつけておこう。しかしこんな事が現実起こりうるのだろうか？両親に相談しても、一笑に付されるだけだろう。あいつなら信じてくれるだろうか？」

思わず日記を閉じた。見るべきではなかった。後悔だけが俺の頭を巡り続ける。あいつが書いている金の燐粉などどこにもない。あいつがそれを塗りつけたであろう空白には僅かな埃がついているだけだ。俺は眩暈を覚えてベットに倒れこんだ。とても両親や美佳に見せられる内容ではない。いや俺自身見るべきではなかった。ふと窓を見ると暁に雲が真っ赤に焼けていた。徐々に明るくなる部屋の中と対称的に、俺の思考は暗い方へ暗い方へと向かっていった。これが普段であれば、あいつが寝惚けたのだからかいの種にもなっただろう。しかしこれは4日後に自ら死を選んだ人間の手記だ。どう見たってまともじゃない。あいつが死んだのは幻覚に悩まされたことだったのか？そんな筈は無い。あいつはそんなに弱い人間じゃない。そう思い込もうとしても8月1日の日記が厳然たる事実を俺に突きつける。

あかしき
暁の中ただ漠然と、戻らぬ友を思い出す。楽しき日々の想い出集め、黒い絶望塗り潰す。塗れば塗るほどその絶望は、凄みを帯びて蘇る。
よみがえ

目を閉じたままベットに横たわっていた俺は最後の言葉を思い出し

た。

「あいつなら信じてくれるだろうか？」

思えばいつも俺はあいつに頼り甘えてばかりいた。それがどうだ、あいつは俺に助けを求めているではないか。今こそ絶望に立ち向かう時だ、そう思いなおして日記を開いた。次の日からはもう日付も無く、ただ殴り書きの文章の羅列だった。

・・・そのあやかに招かれて、常世の国へ歩み入る。あやかしの舞踊り、妖しいまでの艶やかさ。心の澱を流し去る、眩しいまでの清らかさ。いつしか我も誘われ、時をも忘れ、舞い狂う。疲れを知らぬあやかしは、尚も激しく身を振るう・・・

常世の国のさんざめく、弦歌の巷に比ぶれば、現世の国の喧騒は、聴くにも耐えぬ耳障り。常世の国の輝きは、目を眩ませる華やかさ。現世に戻りし我の目は、醜悪極まる世を写す。あの狂宴にいつまでも、時を忘れて、居られぬものか・・・

まるで御伽噺の世界だ。しかし少しずつではあるがあいつが見た世界が理解出来てきた。あやかしだか妖精の類に誘われて、あいつはその饗宴に酔い痴れていたのだ。ここで俺は我に帰った。俺はこの続きを読んでもいいのだろうか？あいつはこの不思議な世界にのめり込み、還らぬ人となった。俺も続きを読めば平静ではいられなくなるのかも知れない。ページを繰るのが恐ろしくなってきた。気が付くと俺は部屋を飛び出していた。

気が付くと俺は美香の家の前にいた。チャイムを鳴らすと幽鬼のように竄れ果てた美香が出てきた。眼窩に落ち窪んだ目、血の気を失いこけた頬、あいつが見て来た世界が桃源郷なら、美香と俺がいるのは正に地獄だ。元が美しい美佳だけに、あまりにも哀れな姿だった。俺は激しい憤りとともに己が自制を振り切った。あらん限り

の力で泣きながら美佳を抱き締めた。美佳は混乱する俺の気持ちを探るかのように、何も言わずに身を任せてくれた。正に菩薩だった。彼女こそ幸せになって然るべき女性なのだ。そんな美佳を生き地獄に墮としたあいつが許せなかった。しかしあいつはもう拳の届くところにいない。俺がどんなに猛っても、その怒りはあいつには届かない。ならばあいつと向き合うまでだ。おまえが惹き込まれたその世界を俺も見届けてみせる。俺は立ち尽くす美香に踵を返して家へと戻った。

今宵もあやかし舞い降りて、我を常世へ連れ帰る……」
どうやらその宴は毎晩のように行われていたようだ。もはや文章にもならぬ言葉の羅列のなかにもその宴の華やかさどんどんエスカレートしていくのが伺える。解読困難な日記の中、どうやらあやかしの女王らしきものが現れていた。

……美しきその御姿は、天の使いと、見紛うばかり。白磁の肌と、絹の髪、目を眩ませる艶やかさ。触れる柔肌、その吐息、溢れんばかりのたおやかさ……

あいつはそれに没頭しているようだ。もはや俺のことは勿論、美佳のことすらあいつの中から消え去っていた事だろう。俺をそして美佳をも忘れ去らせたその女王が、恐らくはあいつを死に追いやった張本人に違いない。もう俺の中から恐怖は消え去っていた。あいつに女王が付いているなら、俺には美佳が付いている。そして俺は最後のページに辿り着いた。

……愛しの君の御姿に、翳りを色濃くさせるもの。愛しの瞼を湿らせて、頬を怒りに染めるもの。嘆きの訳は、あの輩常世を穢すあの獣。醜怪な身と、鉄の爪、常世を引き裂く悪の牙……

読み返してみても何となく理解した。あやかしどもの宴とやらは、あ

いつの家の裏山で行われていたのだ。そしてそこで行われていた工事はあやかしの国を破壊することに他ならない。それを妨害する為にあいつは利用されたのだ。あやかしはあいつを誘惑して仲間に引き込み、文中にあった獣、つまりブルドーザーに飛び込ませたのだ。あやかしの思惑通り人死にがあつた工事現場は閉鎖され、以前の静けさを取り戻している。あやかしどもはさぞかし喜んで、宴に興じている事だろう。あいつもそこにいるのだろうか、それで満足だったのだろうか……。

数日後俺は美佳を連れてあの裏山に登った。美佳はもちろん、誰にも日記の事は話していない。工事現場は依然閉鎖されたままで、あいつが死んだ場所には沢山の花束が備えられていた。そしてあいつが轢かれたブルドーザーはそのまま放置され、あたかも戦いに敗れ打ち捨てられた巨大な獣に見えた。俺は美佳の肩をそつと抱き寄せた。幾分落ち着きを取り戻していた美佳はそんな俺を不思議そうに眺めた。これからは俺がお前を守つてやる。どんな運命からもうして辛い過去からも。そんな決意を固める俺の耳元であいつが囁いた。

常世とこよの君の手を取りて、金の筵むしろを行く我を、現世いまで見上げる友の哀しむ。

俺は何も言い返せず、ただ美佳を抱き寄せる事しかできなかった。

(後書き)

如何でしたでしょうか？途中に混ぜた七五調がかえって読みづらいかも知れません。叱咤激励誤字脱字のご指摘等お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9947d/>

夏の日の幻

2011年10月4日16時51分発行